

べっふの文化財

No. 42

平成24年3月

－別府市の古墳文化－



別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会

目 次

1	はじめに	1
2	古墳時代以前の別府	1
3	別府湾沿岸の古墳文化	2
4	別府の古墳文化の始まり	4
5	花開く後期古墳文化	6
6	鬼ノ岩屋古墳群が語るもの	11
7	鷹塚古墳について	14
8	別府の横穴墓	16
9	速見・国東地方の古墳時代首長の盛衰	16
10	おわりに	18

【口絵 鷹塚古墳空中写真(西から、遠景は別府湾)】

1. はじめに

平成21年から別府大学文化財研究所は、別府市春木地区に所在する鷹塚古墳の発掘調査を実施した。別府大学の発表によれば、鷹塚古墳は、予想に反してその墳形は方墳である可能性が高く、その規模は一辺が30m近い、方墳としては大型のものであることが明らかとなった（上野・玉川 2010）。



写真1. 実相寺を中心とした石垣扇状地（羽室丘陵から）

別府市内には、これまで国指定史跡である鬼ノ岩屋^{おに いわや}1号墳、同2号墳、また、市指定の太郎塚・次郎塚古墳が著名な古墳として知られていたが、これに新たに鷹塚古墳が加わることになった。さらに、市内春木地区では平成17年に春木芳元遺跡で5世紀後葉の大型の箱式石棺が調査されており、別府の古墳時代がより豊かなものとなってきている。今回、こうした新しい別府市の古墳時代の資料の知見は、これまでの大分県のみならず東九州の古墳文化を見直す上で大変重要なことであり、さらに郷土の文化財保護の推進にとっても意義深いものと思われる。

2. 古墳時代以前の別府

別府市は東九州大分県のほぼ中央に位置する、自然に恵まれた温泉都市である。この地は、九州を斜断する別府・島原地溝帯の東端部別府湾の西岸にあたる。その背後は、鶴見岳、硫黄岳（伽藍岳）等の活火山があり、その間は緩やかな石垣原扇状地が占める。その北部は火山性台地^{じゅうもん}の十文字^{じばる}原高原や丘陵地が広がる。

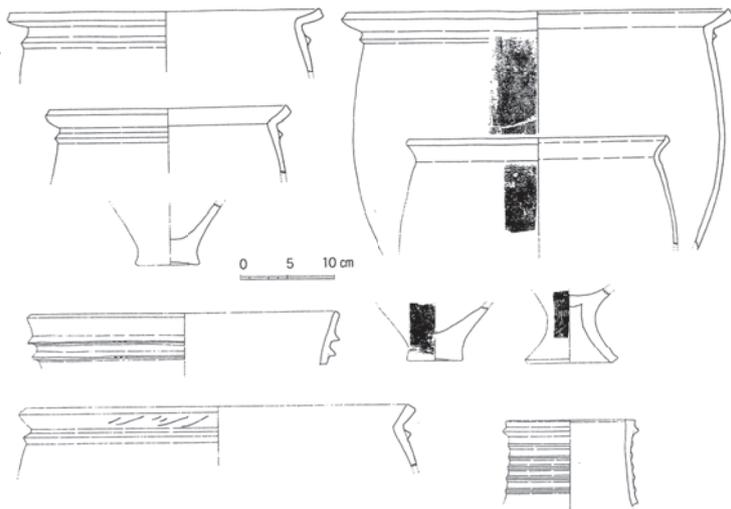


図1. 羽室遺跡出土の弥生時代中期の土器

別府市地域に最初に旧石器人や縄文人が足跡を残したのは、市北部の台地や丘陵地帯である。羽室遺跡や十文字原遺跡はその代表的なものである。羽室遺跡は、その後の弥生時代の

高位性集落遺跡としても重要である。しかし、この時代の生活の基盤は、農業生産であるところから、その遺跡の多くは石垣原扇状地の中に見られる。それが主に集中するところは、実相寺山の東麓部一帯の北は平田川、南は境川に挟まれる地域である。扇状地の扇中央部にあたるこの地は、地形も緩やかで水利の面からも、農業と集落の立地に適していたとみられる。とくにその間を流れる春木川の周辺には、えんつうじ 円通寺遺跡、はるきよしもと 春木芳元遺跡、きたいしがき 北石垣遺跡、すえき 末行遺跡等の遺跡が集中する。

石垣原扇状地は、このように弥生時代から稲作農業を主体とする集落が各地に形成され、それが徐々に成長、拡大していったのではないかと考えられる。その傾向は、古墳時代になっても続いていったことは確実である。古墳時代後期にかかるところは、その生産力が大きくなり、一大勢力を結集できる程になったものと推定される。いずれにしてもこの地は、古代・中世において「石垣荘」となったところであり、その生産性の高さは非常に大きい地域であったといえることができる。

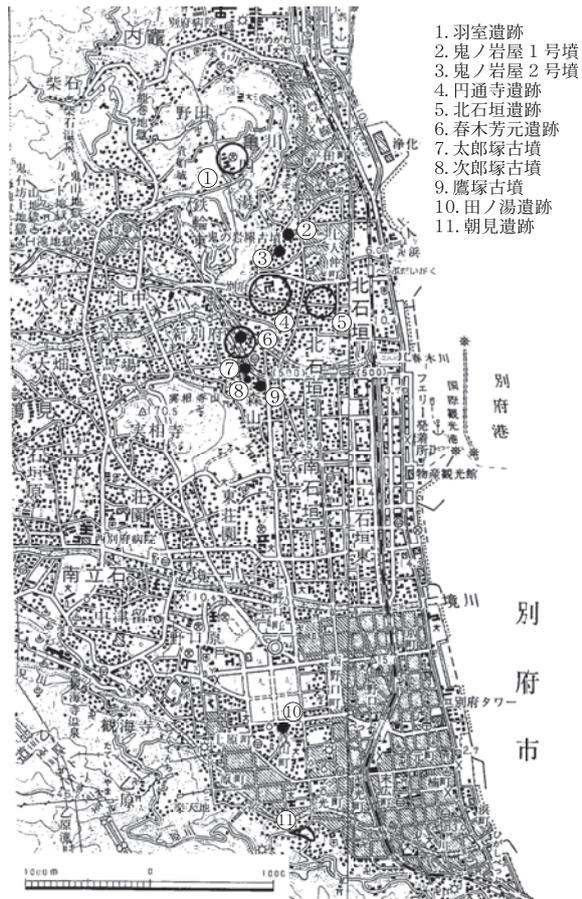


図2. 別府市内主要弥生・古墳時代遺跡分布図
 (『5万分の1、大分』より)

3. 別府湾沿岸の古墳文化

別府湾は日本列島にとって歴史の海ともいべき瀬戸内海の西端部にある。瀬戸内海が日本文化の形成の上で極めて重要な役割を果たしてきたように、その支湾である別府湾も東九州の歴史と文化に大きな貢献をなしたことも事実である。東北九州の豊地方は、この瀬戸内海を通して、畿内地方との結びつきが強く、その最も顕著な時代が古墳時代であったといえる。そのことを示す各期の古墳がこの別府湾の沿岸部の各地に残されており、その変遷を追うことができる。

この地域で最も古い畿内中央政権との結びつきを示す古墳は、国東市安岐町に所在するしもばる 下原古墳である。全長30mに満たない小さな前方後円墳である下原古墳は、畿内地方との強い関係を示す豊地方最古の首長墓である。その形は、まきむく 纏向型と呼ばれる前方部がばち 撥形に開くもので、畿内政権の豊地方南部への最初の足がかりと見ることができる。その時期は3世紀

末頃とみられる。その後、下原古墳に近い杵築市狩宿の丘陵上にこぐまやま小熊山古墳が出現する。小熊山古墳は全長130mに達する豊地方最大の前方後円墳であり、豊前京都郡荻田町の九州最古の石塚山古墳いしづかやまと同規模、時期はそれにつづく4世紀初頭とみられる。この小熊山古墳が国東半島の東南端部である別府湾北口の位置につくられた意義は大きい。その被葬者は、畿内大王家と深い関係の人物とみられ、この時期、豊地方の盟主として、豊地方のみならず九州一円にも力を及ぼしたものと思われる。

このように、古墳時代前期の段階は、旧国前郡である国東半島の勢力が圧倒的に優位であった。その後、5世紀に入る時期にはその状況に変化がみられる。前代の国東半島の勢力は大きく後退、しかも東西に分割される。そして小熊山古墳被葬者の直系とみられる首長は、大型の円墳の築造にとどまる。

その古墳が杵築市おとうやま御塔山古墳である。

長径80mに及ぶ巨大な円墳として小熊山古墳に近接する別府湾口に造られる。では、次の古墳時代中期の段階には、豊地方の主力となる盟主墳はどこに移ったのであろうか。それは、別府湾を挟んで国東地方と対峙する旧海部郡、佐賀関半島の地である。

4世紀末から5世紀初にかけて、この地に2つの巨大な前方後円墳が造られる。まず、旧北海部郡佐賀関町幸崎地区（現大分市）の海岸近くに全長110mのつきやま築山古墳が、つづいて大分市坂ノ市地区（旧海部郡）に全長120mのかめづか亀塚古墳が別府湾一帯を圧するように築造される。いずれも豊地方最大の中期古墳であり、豊の盟主墳であることに間違いはない。こうした、前期・中期前半の豊の盟主墳が別府湾を臨む海岸近くに立地していることは、その首長が水軍の長としての性格を持っていたことを示している。この時期は、瀬戸内沿岸の各地にこうした臨海性の首長墳が数多く造られていることも大きな特徴といえる。

古墳時代中期末には、豊の盟主墳は、再び豊前京都郡に移る。そこは、豊の最初の盟主墳

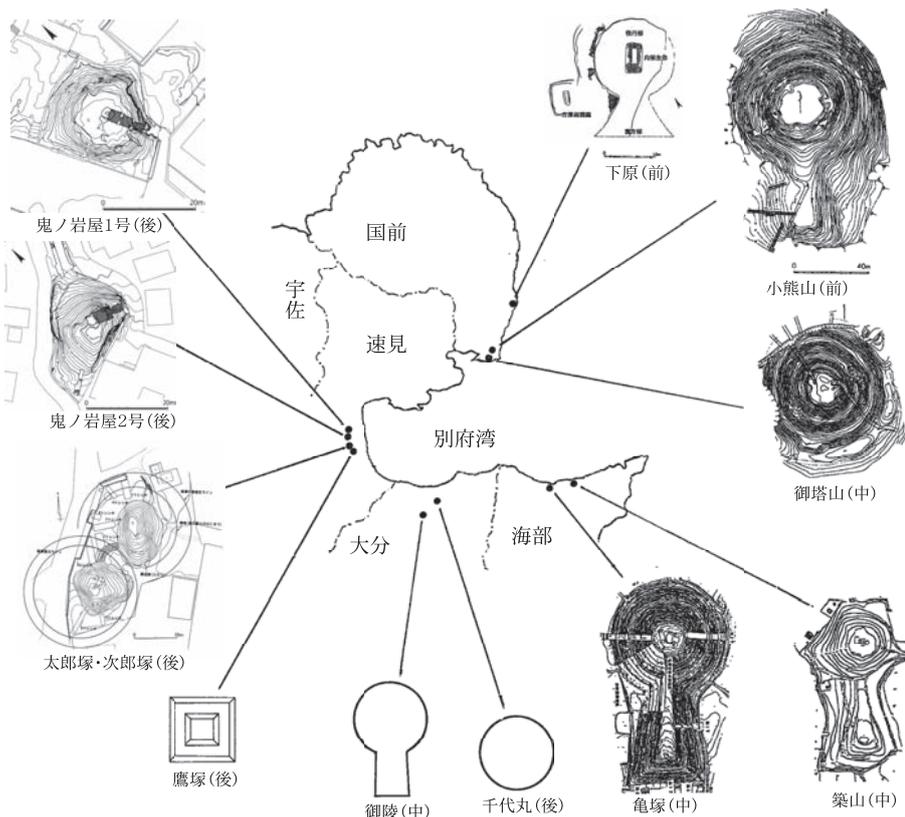


図3. 別府湾沿岸の主要古墳〔縮尺不同（ ）内は時期〕

石塚山古墳の故地^{こち}である。その後、古墳時代後期はこの地に継続して豊の盟主墳が造られる。旧京都郡のこの地に、庄屋塚古墳^{しょうやづか}、八雷古墳^{はちらい}、綾塚古墳^{あやづか}、橘塚古墳^{たちなぼづか}がその形態を変えながら築かれる。前二者は前方後円墳、後者は巨大な横穴式石室墳であり、各々円墳、方墳の外形をもつ。とくに、後者の2つの巨石墳は、別府市の鬼ノ岩屋1号墳・2号墳及び鷹塚古墳と多くの共通要素をもっていることは重要である。

古墳時代後期では、別府湾沿岸の首長層はどのように変化したかといえ、その主力は、旧速見郡域の別府地域に移動したことは明らかである。古墳時代前・中期に見るべき首長墳が存在しなかった別府地域に、豊後地方最大の横穴石室墳が連続して築造されることがそのことを示している。

4. 別府の古墳文化の始まり

別府湾の北岸の杵築・国東地方と南岸の大分・海部地方には、古墳時代前・中期の大型の墳丘墓が多く造られてきたが、湾奥の別府地域にはその時期の大型古墳は見られない。この時期では別府の地に際立った首長は存在しなかったと思われる。

はるきよしもと はこしきせつかん 春木芳元遺跡の箱式石棺

古墳時代中期の末葉の頃になると石垣原地域に有力者のものとみられる石棺墓が出現する。実相寺古墳群に近い春木芳元遺跡である。標高60m程の緩傾斜地にあり、2基の組合せの箱式石棺が発掘調査によって明らかにされた。1号石棺は長軸2.3m、短軸1.0mを測り、石棺としては大型である。頭位は東側で枕状の高まりが認められた。棺内からは、鉄剣、剣刀、鉄斧、ガラス小玉が出土している。



写真2. 春木芳元遺跡1号石棺

1号石棺には隅丸方形と推定される周溝の一部が見つかることから、かつて封土をもつ一辺6mを越える方形の台状墓であったと想定できる。また、この周溝付近からまとまった須恵器が出土している。その特徴から5世紀の後半の時期と思われる。2号石棺は1号石棺の北西45mの位置にある小型のもので、石棺内から出土した須恵器から6世紀の中頃と考えられる。1号・2号石棺に使用された石材は、別府市内の実相

寺山等に産する凝灰岩質安山岩を用いた肉厚の板材に加工したものである。

春木芳元遺跡の1号石棺は、石棺としては規模が大きいものであり、しかもその加工が入念である。また、棺内の鉄剣等の副葬品も豊富である。さらに残された周溝の痕跡から小規模の墳丘をもっていた主体部とみてよい。これらのことから、1号石棺は、春木芳元古墳と称してよいものであり、別府地域に初めて出現した小首長墓の可能性が高い。

別府地域の石棺系の墳墓については、組合せ式箱式石棺である朝見石棺群、また南明荘の建設中に発見された田の湯石蓋土墳墓群がある。前者は朝見地区の枇杷の木台で戦前に発見された組合せ式箱式石棺群であるが詳細は不明である。後者は不十分な調査であるが20基程が確認されている。副葬品は極めて少なく鉄刀、鉄剣、雲珠の破片等が見られるにすぎない。その時期は6世紀前半頃ではないかと推定される。

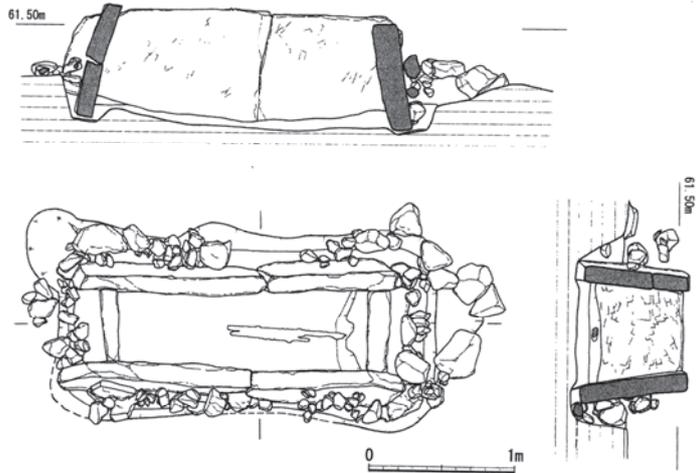


図4. 春木芳元遺跡1号石棺実測図

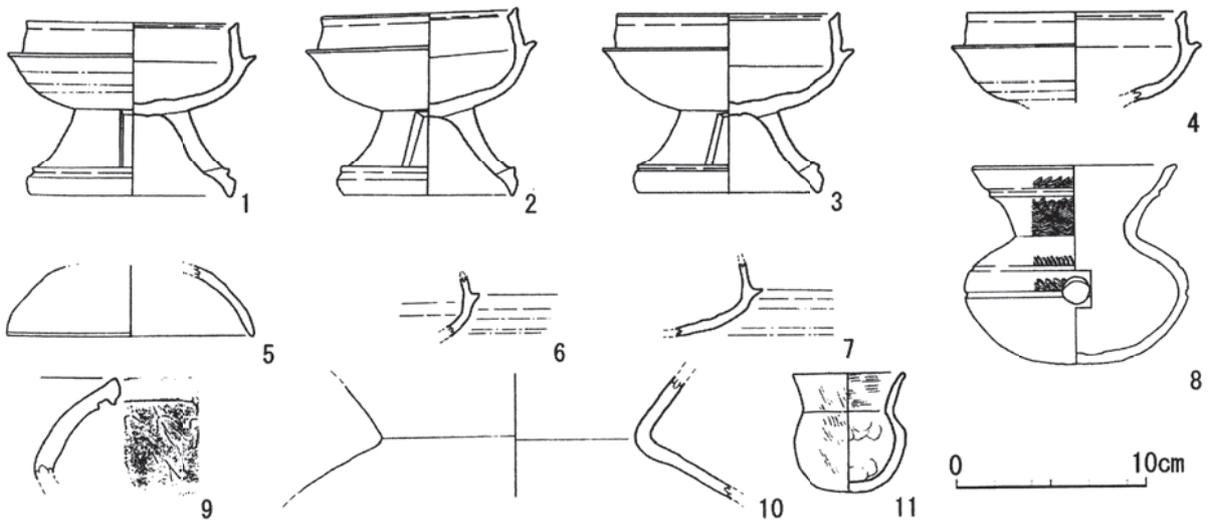


図5. 1号石棺周辺部出土遺物実測図

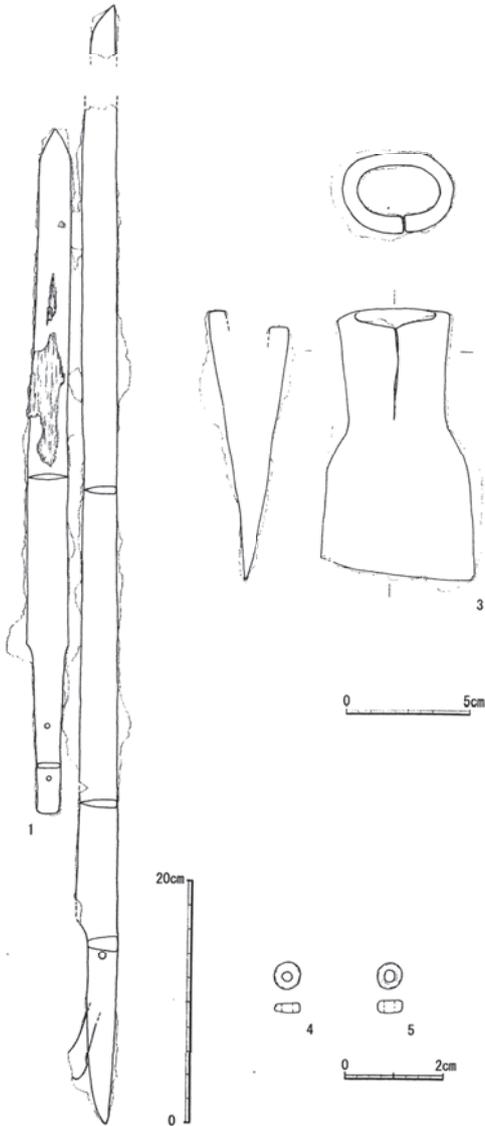


図6. 1号石棺内出土遺物実測図

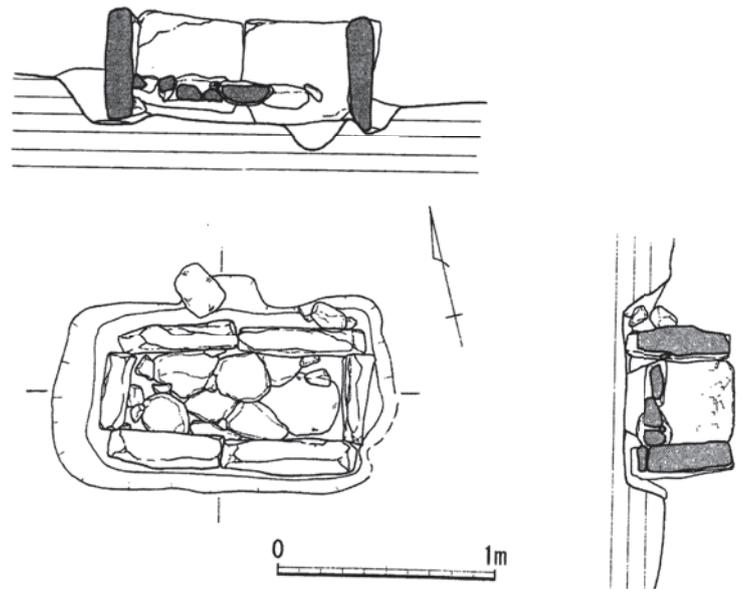


図7. 春木芳元遺跡2号石棺実測図

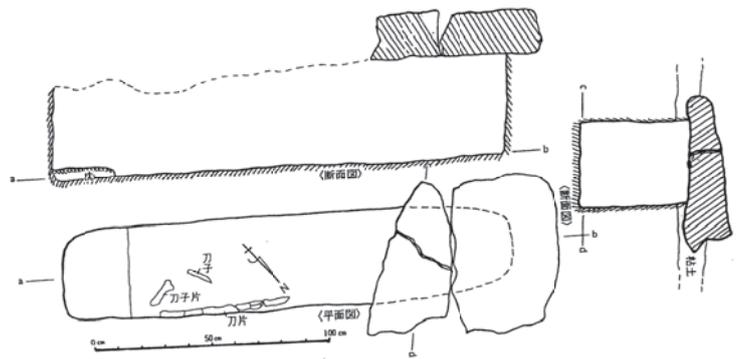


図8. 田の湯（旧南明荘）遺跡石蓋土壙墓1号実測図

5. 花開く後期古墳文化

別府石垣原扇状地における古墳時代は、約1,500年前の中期の終末頃、春木川下流の春木・北石垣一帯が中心となって最初の首長層が形成されたものとみられる。その背景となったものは、やはりこの地域の生産性の高さである。とくに春木川の両岸には、弥生中期の春木芳元遺跡、弥生後期～古墳前の円通寺遺跡、北石垣遺跡等のまとまった集落遺跡が集中する。これらの遺跡は、現在住宅地であるため、その全様は明らかではないが弥生時代にひきつづき古墳時代に移っても、この地域に安定した集落が存続していたことは疑いない。それは、平田川や春木川を利用した扇状地の水田耕作と生活用水としての湧水に恵まれていたことと無関係ではない。

古墳時代前期の遺物は北石垣遺跡で見つっているが、この時代の墳墓は発見されていない。この段階では、まだ、首長層の形成は未成熟であったといわざるを得ない。中期の終り頃となり、春木芳元1号石棺にみられるように初めて小首長と呼べるものが出現する。

じっそうじ
実相寺古墳群

石垣原扇状地のほぼ中央、実相寺山の東麓にある実相寺古墳群は、春木芳元遺跡の南300m程のところであり、太郎塚古墳、次郎塚古墳、鷹塚古墳、天神畑古墳^{てんじんばた}の4基の後期横穴式古墳によって構成される。別府地域で出現した最初の本格的な首長墳といえよう。ただし、石室の規模がわかっているのは、天神畑古墳のみであり、各々格差があるものとみられる。



写真3. 太郎塚・次郎塚古墳近景

太郎塚・次郎塚古墳

この2つの古墳は、径15m前後の盛土を残す円墳であるが、封土の流失がはげしく、横穴石室の上部（天井石？）が露出している。両古墳は、内部の実体が不明であるものの、横穴石室墳であることは間違いなく、6世紀後半の中首長の墳墓と推定される。平成20年2月に別府大学文学部文化財学科と文化財研究所によって墳丘規模の確認のための測量と試掘調査が行われた。

その結果、いくつかの事実が明らかになった。まず、両墳ともに周溝によって円墳であることが確認された。そし

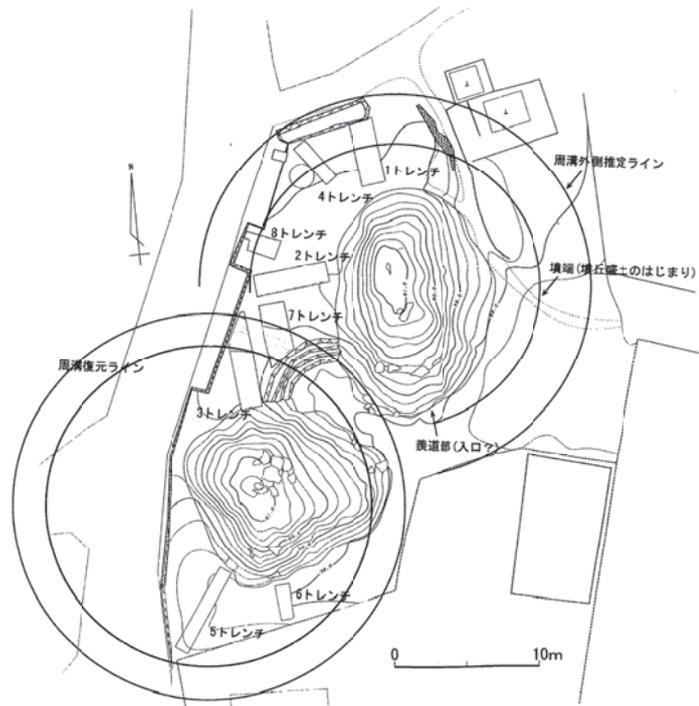


図9. 太郎塚古墳（下）・次郎塚古墳（上）墳丘図

て、その規模はいずれも予想を越える径27mに達するものであった。さらに、北に接する次郎塚古墳の周溝が、太郎塚古墳の手前にとまっているところから太郎塚古墳が先に築造されたものと考えられている。そして、太郎塚古墳の周溝底から甕^{かめ}をはじめとする須恵器が多数

出土している。それら須恵器の特徴から時期は、6世紀後半代に求められる。破片となった大甕おおがめは、古墳の葬送儀礼の際に用いられたものであり、その被葬者の地位をうかがわせるものである。

径27mに及ぶ墳丘の規模は、県内の他の後期横穴石室墳と比較しても遜色はない。内部の石室の規模は不明としても、後期中首長の墳墓として評価できるものである。そして、そのことを補完するものとして、太郎塚古墳から出土したと伝えられる「金銅製唐草文鏡板」がある。鏡板は馬具の一種で、顔頭部に付けられる轡くつわと対をなすものである。金銅製とは金メッキ（鍍金）を施した青銅製品であり、極めて装飾性の高いものである。

その製作法は、青銅の地金板に唐草文を透かし彫りし、そのハート形の外縁を鋸留めにして最後に鍍金するという手のこんだものである。おそらくこうした精緻な工芸品は、三韓時代の韓半島からもたらされたものであろう。それは間違いなく、古墳の主の威信財として副葬されたものであろう。



写真4. 伝太郎塚古墳出土 金銅唐草文鏡板

天神畑古墳

太郎塚古墳・次郎塚古墳の南西100m程のところ字天神畑で平成2年に横穴石室墳が発見され、調査された。この古墳は、封土が削平されていたものの石室の基底部の石材が残されており、その構造を観察することができた。それは単式石室の小規模なものである。石材は、鶴見火山系の硬い安山岩を用いており、奥壁と側壁の一部に赤い彩色がみられる。



写真5. 発掘された天神畑古墳

これが壁画の文様なのか、壁内面に塗布された赤色顔料の痕跡なのかは不明である。鬼ノ岩屋古墳の例からみて、壁画装飾があった可能性も全く否定はできない。太郎塚・次郎塚古墳の石室構造が不明であるだけに、天神畑古墳の情報は貴重なものである。なお、天神畑古墳は、宅地の造成に伴う緊急調査であったため、現地保存はできず、石室材は実相寺古代遺跡公園内に移築復元されている。

実相寺古墳群は、現在住宅地帯の中になるため、天神畑古墳のように、すでにその墳丘を亡失したものが他に存在したかもしれない。かつては、天神畑古墳規模の小円墳が複数造られていた可能性が高い。今後、何かの機会にそうしたものが発見されるかもしれない。

鬼ノ岩屋古墳群

太郎塚古墳・次郎塚古墳につづいて別府地域の首長墳として築造されるのが鬼ノ岩屋1号墳、2号墳の両大型古墳である。大型墳としたのは、両墳とも豊後地方では卓越した規模の横穴式石室を内部構造としてもつからである。この時期の大型の横穴石室墳としては、旧国前郡（国東市安岐町）の塚山古墳と旧速見郡（杵築市）の七双司古墳が知られているが、それよりも一クラス大きい。旧国前郡・速見郡をみれば、古墳時代前・中期は圧倒的に国東地域の首長の勢力が強大であったが、後期にその中心が速見郡の別府地域に移動したことを示す。



写真6. 羽室丘陵からみた鬼ノ岩屋古墳群
(中央左が1号墳、右端が2号墳)

鬼ノ岩屋古墳1号墳

鬼ノ岩屋古墳群は、石垣原扇状地の北部を流れる平田川の右岸の別府市上人地区に所在する。この地は、実相寺古墳群の約1km北にあり、より海岸に近い位置にある。1号墳は上人小学校の敷地の南西隅にあって、現状は直径17m、高さ6mの墳丘を残している。試掘調査の結果、墳丘の復元径が24mとされている。墳丘上には3段にわたって列石が廻らされ、墳丘そのものも段築とされていたことがわかる。内部主体は、複式の横穴式石室である。玄室は2.8m×2.7m、前室は2.5m×2.5mを計る。複式石室としては県内最大の規模を示す。玄室である奥室には、現在落下しているが、石屋形が見られる。石屋形は熊本県地方に多い一種の柩（遺体安置施設）であり、それは極めて特異なものである。

石室内部は一面に朱で塗布されており、さらに前室の奥壁に向かって右側壁、前室と玄室の間の袖石に装飾文様が描かれている。また、右側壁の腰石上面に黄色顔料で山形文様を連続して描いている。その文様

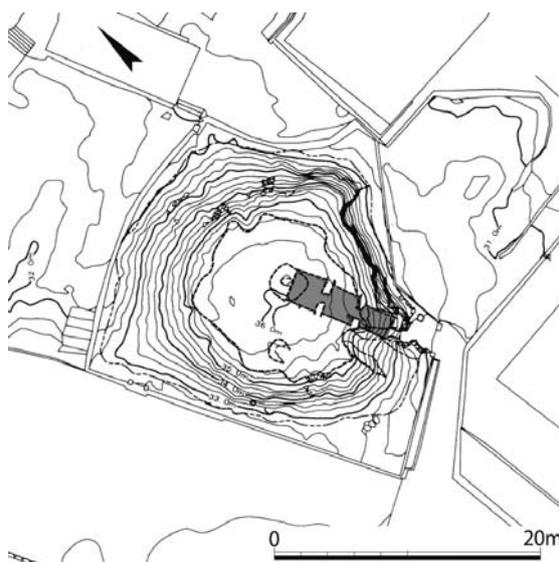


図10. 鬼ノ岩屋1号墳 墳丘測量図

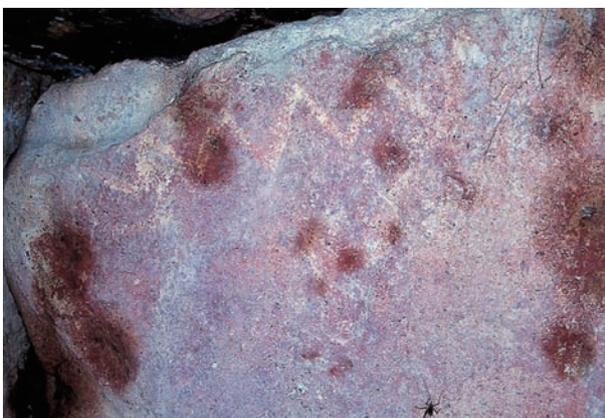


写真7. 1号墳石室内壁画（山形文）

は右から左へ流れるように10個の山形文である。さらに袖石前面の上部に、同じく黄色顔料で鞞、鞞、弧状文様が、そして下面には黒色顔料で三角文を中心に弧状、S字文様が描かれている。この袖石の文様は、近年の調査によって確認されたもので、日田、筑後地方の古墳壁画文様と比較検討する上で重要なものである。

鬼ノ岩屋古墳1号墳は、玄室に石屋形をもつことからその発生地である肥後地方からの影響を考えない訳にはいかない。それには肥後のあるいは筑後地方の技術者の介在があったとみられる。石室内の文様構成についても、同様のことがいえる。

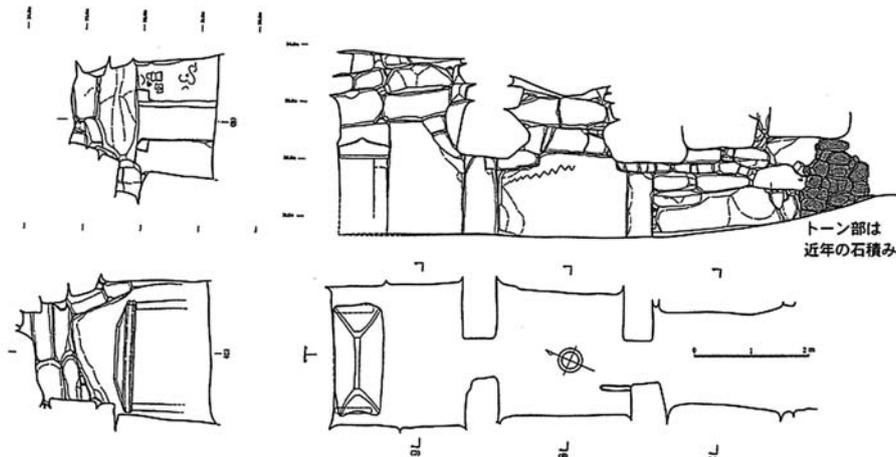


図11. 鬼ノ岩屋1号墳石室測量図（石屋形の屋根は復位）

鬼ノ岩屋古墳2号墳

鬼ノ岩屋2号墳は、1号墳の南西100mのところであり、墳丘の現状は23m×18.5m、高さ5m、1号墳に比べかなり崩れた形である。周溝は確認されていないが円墳であることは確実のようである。復元径は30mを越えるものと推定される。2号墳の石室は単室構造であり、羨道は東南部に開口している。2号墳も石室内に装飾をもつ彩色壁画古墳である。その部位は、玄室の左右袖石、玄室の右屍床中の側壁、中央屍床の正面、屍床中央左腰石から一段目の側石の5ヶ所に認められる。石室内は、1号墳と同様に全面に朱とみられる赤色顔料を塗布していたものと推定される。屍床正面の文様は邪視文とみられる彫りこみであり、特異である。邪視文の上部には、不明瞭であるが、盾、動物、双脚輪状文、蕨手文等が見られる。左側壁には同心円文が二つ並列して描かれている。また、玄室右屍床の側壁の文様は、三角文、唐草文と鞞とみられるものである。

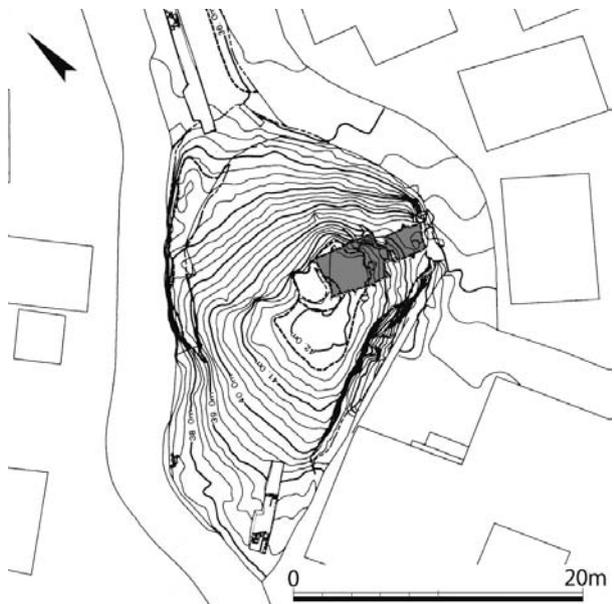


図12. 鬼ノ岩屋2号墳 墳丘測量図

屍床正面の文様は邪視文とみられる彫りこみであり、特異である。邪視文の上部には、不明瞭であるが、盾、動物、双脚輪状文、蕨手文等が見られる。左側壁には同心円文が二つ並列して描かれている。また、玄室右屍床の側壁の文様は、三角文、唐草文と鞞とみられるものである。

2号墳の石室の規模は、玄室が3.0m×4.2m、羨道部の幅は1.7mと豊後地方最大の値を持つ。1号墳と同様に巨大な石材による横穴式石室であり、まさに巨石墳と呼ぶにふさわしい。玄室内の遺体安置施設は、1号墳が石屋形であるのに対し、2号墳は大小の屍床をもつものであり、その違いに興味をもたれる。2号墳も1号墳と同様に、その築造に当たっては、筑後地方等からの技術の受け入れがあったとみななければならない。それは一つは巨石による石室構築であり、そして壁画装飾の製作である。両巨石墳を構成するこの2大要素は、豊後の域内の当時の文化と技術によってなされたとは考えられない。それは、九州における文化の先進地である筑後方面から日田、玖珠地方を經由してもたらされたと思われる。いずれにしても、鬼ノ岩屋1号墳、2号墳ともに巨石による大規模な石室構造と北部九州の後期首長墳に通有の壁画装飾をもつところから、豊後最大の後期古墳と考えてよい。

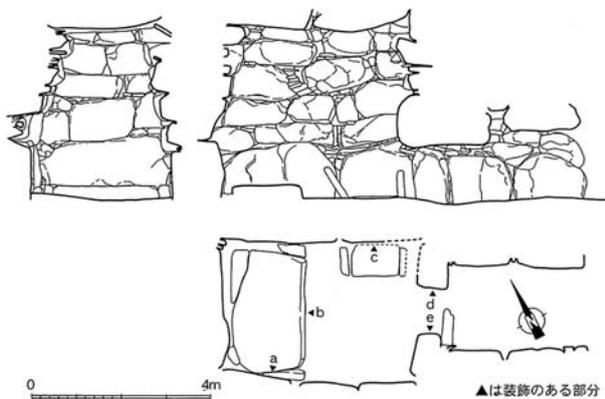


図13. 鬼ノ岩屋2号墳石室測量図



写真8. 2号墳屍床の壁画

6. 鬼ノ岩屋古墳群が語るもの

豊後地方の横穴石室の規模比較

古墳時代の首長層の権威の象徴として視覚に訴える最大のものはその墳墓である。古墳時代前・中期において、その階級性はとりわけその前方後円墳に代表される墳丘規模に表徴されるものである。それによって古墳時代は、前方後円墳体制といわれるものである。後期になり、首長墓としての前方後円墳は地方においては少なくなってくる。その墳形も円墳そして方墳となる。そして、後期における古墳築造の労力の主体は、墳丘規模から石室規模に変化する。そこに被葬者の階級性が示されるように変化してくる。

豊地方（豊前・豊後）で最大の石室構造をもつものは、福岡県京都郡みやこ町に所在する綾塚古墳、橘塚古墳である。綾塚古墳の墳丘は円墳で複室構造をもつ。玄室は3.5m×3.5mと鬼ノ岩屋1号墳、2号墳のそれと比べ一回り大きい。橘塚古墳は方墳であり、石室は綾塚古墳とほぼ同規模のやはり複室構造である。このことから豊前京都郡の両巨古墳は、古墳時

代後期後葉の最大の横穴式石室墳であり、豊地方の盟主墳（広域盟主墳）とすることができる。それに次ぐのが、鬼ノ岩屋1号墳、2号墳なのである。その地位は、国前・速見両郡に君臨する大首長と評価されるものである。

一方、国東市安岐町に所在する塚山古墳、一の瀬2号墳や杵築市七双司古墳も大きな巨石による単室の横穴石室墳であるが、一クラス小さいものである。それでもその規模からみて、旧国前郡の中核となる中首長層の墳墓であることには違いない。中期の大首長墳である杵築市御塔山古墳の系譜をひくものと考えられる。杵築市の七双子4号墳、8号墳あるいは的場2号墳等は、その次に位置付けられる小首長クラスのものともみられる。別府市天神畑古墳もこのクラスに属するものと思われる。石室の構造、規模が不明な太郎塚古墳、次郎塚古墳がこの規模に相当する石室なのか興味深いものがある。

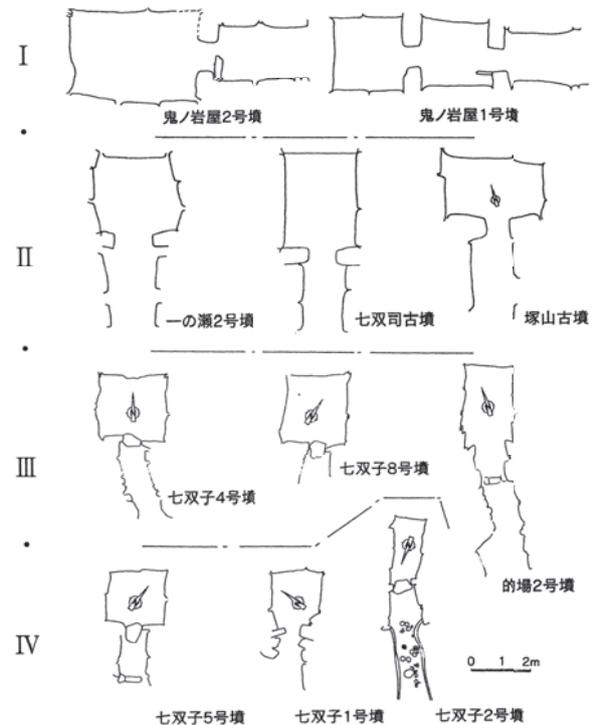


図14. 速見・東国東地方横穴石室の規模比較

装飾壁画文化の伝播

鬼ノ岩屋1号墳、2号墳ともに東九州では数少ない彩色系装飾壁画をもつ古墳であることは重要である。大分県内では、日田地方、玖珠地方とこの別府市地域にのみ彩色系装飾石室がみられる。日田地方では、法恩寺山3号墳、ガランドヤ1号墳、2号墳、玖珠地方では鬼塚古墳がそれである。九州における彩色壁画は、この時期福岡県筑後地方で発達をみたもので、そのほか、筑前、肥前、肥後地方にも多くのこされている。鬼ノ岩屋1号・2号墳の石室内に施された彩色壁画の源流を求めるとすれば、玖珠、日田地方を經由しておのずから筑後地方となる。また、鬼ノ岩屋1号墳にみられた石室形も肥後起源とされるものであり、これも筑後地方を經由してもたらされたものとみることができる。ここに、筑後一日田一玖珠一別府（速見）という、筑後地方と豊後の首長層を結ぶ枢軸線を想定することができる。北部九州では、6世紀の前半代、筑後八女地方に全長140mを越える壮大な前方後円墳岩戸山古墳が築かれる。筑後風土記（逸文）に記される筑紫国造「磐井」の墳墓とされるもので、この時期の北部九州の統轄者（超広域盟主）にふさわしい規模である。

7. 鷹塚古墳について

太郎塚古墳・次郎塚古墳の南西100mの位置に鷹塚古墳がある。これらは天神畑古墳とともに実相寺古墳群を構成するものであるが、鷹塚古墳は現在も別府大学文化財研究所によって調査が進行中のことでもあり、最後に扱うことにした。

鷹塚古墳は、実相寺古墳群の中で最も大きい墳丘を残している横穴式石室墳である。これまで、全く未調査であったが、平成20年度から別府大学文化財研究所によって、墳丘の測量と発掘調査が行われている。そして、これまでの墳丘の周辺と石室羨道部の発掘調査によって重要な事実が次々と明らかにされてきている。まず、墳形については、測量の結果でも円墳とされていたものが、平成21年度の周溝確認調査によって、方形墳であることが判明した。それは墳丘の北側と西側に設定した複数の試掘溝によって直線状に延びる墳端の根石列と隅角コーナーを確認したことによる。この時、墳端外側平坦面の地山直上から須恵器の高杯5個体分と杯身、杯蓋片がまとまって出土している。これは、本墳の時期を推定する上で重要なものとなる。

これまでの調査によって、鷹塚古墳は、一辺30m弱、高さ5m程の墳丘であることが確認できた。この規模は方墳として決して小さいものではない。豊前甲塚古墳の50m×36m、橘塚古墳の一辺40m前後には及ばないものの、豊後地方における古墳時代後期の方墳としては最大規模のものである。その時期も出土須恵器から6世紀末葉であることも確定できる。

とくに、平成23年度の^{せんだう}羨道部の発掘調査による巨大な石室材には圧倒される。その羨道部の長さ8m、入口幅2.5mの大きさは、橘塚古墳の各々7m、2.9mに比



写真9. 鷹塚古墳空中写真（北西隅角部分）



写真10. 鷹塚古墳石室入口付近の巨石
(中央の板石は加工石材)

べても遜色はない。ちなみに、橘塚古墳は複室構造をもち、石室の全長16m、玄室は長さ3.8m、幅3mである。鷹塚古墳の石室は、これに近い大型のものであることが想像できる。両者は墳形と石室の規模からきわめて近い親縁関係にあったものと思われる。

家形石棺について

実相寺遺跡公園内に2つの家形石棺の蓋がある。これまで、その出自の古墳が不明であったが、鷹塚古墳の調査の際、同敷地内にあったものであることがわかった。とすれば、2つの家形石棺は鷹塚古墳の石室内から持ち出された可能性が高くなる。江戸時代以前と思われる同墳の盗掘により、石室外に運び出されたものであろう。蓋石の一つは、棟部分が狭く棺側に上向きの縄掛突起をもち、棟は端部に向かって軽く湾曲する。そして、その端部に断面U字形の縄掛突起をもつ。もう一つの蓋石は前者よりも新しい型式のもので、幅広い平坦な棟をもつ。棺側と端部に平面台形、断面方形のやや下向きの縄掛突起をもつ。その石材は、春木芳元遺跡の箱式石棺と同じ凝灰岩質の安山岩である。この石材は市内の実相寺山あるいは羽室丘陵に露出している軟質の石材である。いずれかの地に石棺の製作地があったとみられる。



写真11. 実相寺古墳出土の家形石棺

時期が異なる蓋石が2つあるということは、少なくとも2つの石棺が石室内に置かれていたと思われる。鷹塚古墳の玄室の規模は、羨道部の大きさから、鬼ノ岩屋古墳1号・2号墳と同等以上のものであることは確実である。そうであれば、複数の家形石棺が置かれていたと考えても矛盾はない。ともあれ、従来、太郎塚古墳もしくは次郎塚古墳のものではないかと考えられていた2つの家形石棺の蓋石が、今回、鷹塚古墳のものであったとすれば大きな成果と評価できる。古墳

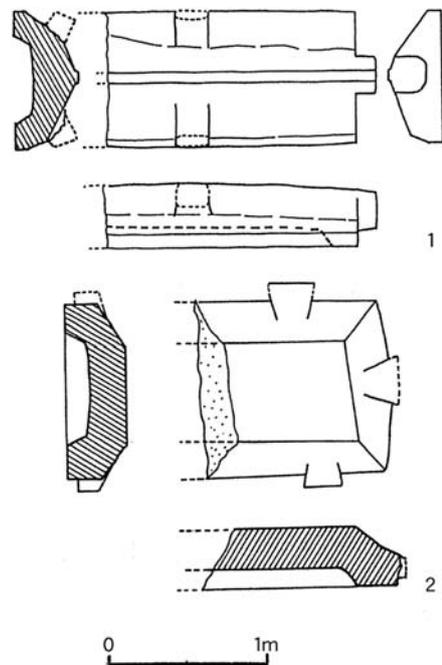


図16. 実相寺古墳群出土の家形石棺

時代後期の終末段階となり、当時、畿内政権中枢の被葬者のものであった方墳と家形石棺が別府の首長墳として採用された意味は非常に大きい。鬼ノ岩屋1号・2号墳段階の北部九州勢力との深い関係に対し、鷹塚古墳の被葬者の畿内中央とのつよい結びつきが変化として読

みとれる。これは、別府の首長層に限られるものでなく豊前北部あるいは他の地方にも見られる政治の集権化に伴う変容と理解される。

8. 別府の横穴墓

古墳時代後期、大分県内でも一般の家族墓として多数つくられた横穴墓が別府市南部の^{はまわき}浜脇地区に見られる。多くの労力を要する横穴式石室墳をつくらない階層の墳墓として、丘陵崖面を穿^{うが}って埋葬室としたものである。浜脇地区の横穴墓は、朝見川断層崖の丘陵斜面の軟かい凝灰岩層に横穴として掘り込んだもので、^{ひらばる}平原・^{しばお}芝尾と金比羅山の2群に分けられる。金比羅山横穴墓群は、丘陵の両側斜面に分布し、26基ほど確認されている。ここでは、墓室内から副葬品として、馬具の鉄製くつわと鏡板、鍍金の耳環、管玉、勾玉、切子玉、白玉、ガラス丸玉のほか、鉄釘、土錘、鉄鏃等が出土している。こうした副葬品からみて、この横穴墓群は、朝見川流域の古墳時代後期の集落の構成員であったと思われる。その中には、当然漁撈民もいたであろうし、より階級の高い有力者も含まれていたと考える。

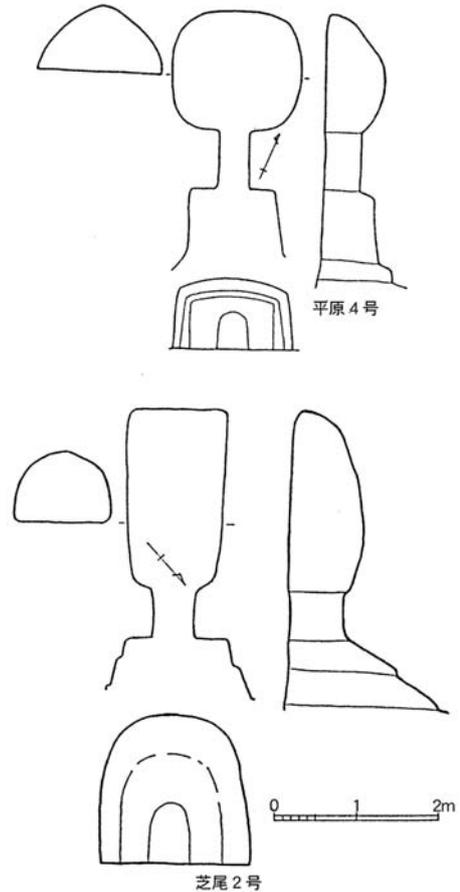


図17. 浜脇地区横穴墓

9. 速見・国東地方の古墳時代首長の盛衰

別府湾を挟んで南岸の大分・海部郡と対峙する速見・国前の両郡は、古墳時代を通じて大きな一つの領域であったと思われる。古墳時代前期の3・4世紀代、中期の5世紀代を通じて別府・速見地域に首長墓たる前方後円墳あるいは大型の円墳はない。一方、国東地方（旧国前郡）には、前期の大型前方後円墳小熊山古墳（全長130m）が豊の盟主墳として別府湾の北口に築かれる。中期に移行しても国東地方には、巨大な円墳である御塔山古墳（杵築市、径80m）、入津原丸山古墳（豊後高田市、径75m）が半島の東西に造られる。豊の盟主の地位は、海部の亀塚古墳（大分市、全長120m）に譲るもののそれに次ぐ大首長の墳墓にふさわしい。古墳時代前・中期は、別府・速見の勢力は完全に国東の支配下にあったものと考えられる。その関係が逆転するのが後期である。

鬼ノ岩屋1号墳・2号墳はともに、当時豊後地方最大の後期横穴式石室墳である。いずれも巨大な石材で構成される巨石墳の代表的なものといえる。この両墳の石室の規模は、国東地方で最大級の塚山古墳、一の瀬2号墳の規模を凌駕する。国東地方にあった支配権が別府・速見地方に移行したことを示す。さらに、その後も鷹塚古墳がその地位をひき継いだものとみられる。その玄室の規模は不明であるが現在わかっている羨道の大きさからみて、豊後最大の石室である可能性が高い。いずれにしても、古墳時代前・中期を通じて、みるべき首長墳が存在しなかった速見郡南部の別府地域であるが、後期に入ると急速に一大勢力となる。そうした地域間の権力移動は何に起因するのであろうか。

古墳時代の前期末から中期にかけては、日本列島の倭国は、韓半島の国々（高句麗・新羅・百濟・加耶）と政治的・軍事的に親近かつ緊張関係にあった。度々の軍事行動もあり、当然、豊地方の国東、海部の首長は水軍として出動したものと推察される。そうした時期に北部九州地方等と親縁関係を結び、勢力を貯えていったのが速見郡の別府の首長であったとみられる。考古学的にその兆候として扱えられるのが、春木芳元遺跡の1号石棺である。これは周溝があるところからかつて墳丘もあり、石棺の大きさと副葬品からみて、この地の最初の首長墳と評価しうるものである。

ともあれ、古墳時代を通して、旧国前・速見郡内で、その大首長権が移動することは、この段階までは、両郡は分かれておらず、一郡として掌握されていたものと考えられる。

おそらく、前・中期の大首長権が国東地方にあるところから、速見郡は旧国前郡から分離したものとみられる。その契機となったのは、後期の別府勢力の急速な台頭にあるのではないかと。そして、完全に分郡するのは、豊前と豊後が分国する7世紀末の頃と推測される。



図18. 別府湾沿岸における首長墓の変遷

郡域	豊前北部		国 前			速 見	海 部	大 分
	京都・仲津ほか	宇 佐	西 部	北 東 部	南 東 部			
1	石塚山	赤塚	大原	狐塚	下原		大塚	亀甲山
2		免ヶ平	伊山		小熊山			
3		草坂		桜八幡		重光	上ノ坊	蓬萊山
4		福勝寺				千光寺 古墳群	築山	御陵
5		角房	入津原丸山		御塔山		亀塚	大臣塚
6	石並	高倉	寢堂	行者原			白塚	
7	御所山	葛原	真玉大塚	番所塚		大原	下山	
8		鶴見	猫石丸山			七双可	大在	
9	庄屋塚		野内	黒津崎			辻	
10	八雷		志手金比羅	伊美鬼塚	菜山 一の瀬 塚山	太郎塚 次郎塚		
	綾塚		雷			冠岩屋1号 冠岩屋2号		
	橋塚					鷹塚		

図19. 豊地方主要古墳編年図

豊の広域
盟主権

 大首長墳
 (国前・速見のみ)

10. おわりに

近年の別府市内における古墳時代の考古学的成果には目覚しいものがある。それは多少開発に伴うものであるが、太郎塚古墳、次郎塚古墳の墳丘規模と前後関係の確認、そして大型石室をもつ畿内型方墳としての鷹塚古墳の成果はあまりに大きい。さらに家形石棺の出所についても本古墳の可能性が高くなった。調査後、移築された春木芳元石棺は、中期末の小首長墳になる可能性もあり、これによって別府の古墳時代の様相がかなり明らかになったといえる。鷹塚古墳の発掘調査がさらに進み、その全容が公表されるようになれば、一層、別府の地にかつて隆盛した古墳文化が理解されよう。こうした、別府の貴重な歴史的文化遺産である古墳や遺跡は、今後さらに、顕彰され、保存活用されていくことが望まれる。本冊子がその一助となれば幸いである。

引用・参考文献

- | | | |
|------------------|------|---------------------------------------------------------------|
| 別府市教育會編 | 1933 | 『別府市誌』 別府市教育会 |
| 賀川光夫 | 1971 | 『大分県の考古学』 吉川弘文館 |
| 南明荘古墳調査団編 | 1979 | 『別府市域における集落景観の変遷資料－南明荘古墳調査報告－』 南明荘ホテル 神田喜安 |
| 大分県教育委員会編 | 1983 | 『羽室遺跡発掘調査概報』 大分県教育委員会 |
| 別府市役所編 | 1985 | 『別府市誌』 別府市役所 |
| 大分県教育委員会 | 1995 | 『大分県文化財調査報告書：大分の装飾古墳』 第92輯 大分県教育委員会 |
| 別府市 | 2003 | 『別府市誌』 別府市 |
| 杵築市誌編集委員会編 | 2005 | 『杵築市誌』 杵築市 |
| 清水宗昭編・著 | 2006 | 『内海と半島の考古学』 私家版 |
| 別府市教育委員会 | 2007 | 『春木芳元遺跡古寺地区－春木芳元遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』 別府市教育委員会 |
| 別府大学文化財学科・文化財研究所 | 2008 | 『太郎塚・次郎塚古墳の学術発掘調査』 現説資料 |
| 別府市教育委員会 | 2009 | 『鬼ノ岩屋古墳 春木芳元遺跡 南石垣遺跡 野田遺跡－市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』 別府市教育委員会 |
| 上野淳也 玉川剛司 | 2010 | 『別府市所在鷹塚古墳の調査－平成22年度の調査概要－』 大分県考古学会発表資料 |
| 清水宗昭 | 2011 | 「国東半島における首長墓の変遷」『古文化談叢』 第65集 pp.103-114 九州古文化研究会 |

挿図・写真の典拠と提供

- | | |
|----|----------------------------------|
| 挿図 | 1は『羽室遺跡発掘概報』 |
| | 4、5、6、7は『春木芳元遺跡古寺地区』 |
| | 8は『南明荘古墳調査報告』 |
| | 9は『太郎塚・次郎塚古墳の学術発掘調査』 |
| | 10、12は『鬼ノ岩屋古墳 春木芳元遺跡 南石垣遺跡 野田遺跡』 |
| | 11、13は『大分の装飾古墳』 |
| | 14、は『杵築市誌』 |
| | 15 [一部加筆]、16、18は『別府市誌』(2003) |
| | 17は『別府市誌』(1985) |
| | 19は「国東半島における首長墓の変遷」による。 |
| 写真 | 4、7、8は別府市教育委員会 |
| | 9、10、口絵は別府大学文化財研究所 |
| | 他は筆者撮影 |

執筆者

執筆 文化財保護審議会委員(考古学・文化財) 清水 宗昭

なお、本書の作成については、別府大学下村智教授、上野淳也助教、玉川剛司氏に資料の提供及び助言をいただいた。末尾ながら謝意を表したい。

べっふの文化財 No.42

発行・編集 平成24年3月30日
別府市教育庁生涯学習課

編 集 別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会

印 刷 株式会社プリメディア